【実践報告】

児童の振り返りを学びにつなげる授業実践

濵﨑知彦　（長崎大学大学院教育学研究科）
瀬戸﨑典夫（長崎大学教育学部）
本多博　　（長崎大学大学院教育学研究科）
藤井佑介　（長崎大学大学院教育学研究科）

1. はじめに

学習指導要領の改訂にあたり、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の重要性が指摘されてきた。平成 29 年 7 月に公示された『小学校学習指導要領解説　総則編』には、授業改善の配慮事項の 1 つとして、「児童が学習の見通しを立てたり学習を振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」が挙げられている。この中には、児童が授業で学習した内容を振り返る機会を設けることなどの指導を通じて、児童の学習習慣の定着や学習意欲の向上を図ることが記されている。

嶋野（2018）は、「振り返り」を「各自（一人称）の学びの捉え直し」と述べ、「振り返りは省察（自分自身を省みて考え巡らすこと）であり、自分自身の学びの味わい直し」であると言い換えている。加えて、学んだことの定着や学びに向かう力を高めるためには、学んだことを整理・確認するだけでは足りず、その時間の学びが自分にとってどのような意味や価値があったかを自覚させることが重要であるとも述べている。また、藤井（2016）は、「反省（振り返り）をして、どのような問題をどのように解決したのか、その過程における思考の機能、知識の活用、コミュニケーションの展開、アイデアの発展などについて、再意識化して整理させることが必要」であるとし、振り返りの必要性について述べている。

上記からも分かる通り、振り返りによって学びを整理したり、捉え直したりすることには、学びの意味や価値を自覚し、学習内容の定着や学びに向かう力を高めることにつながるという意義がある。

振り返りの実践については、永冨（2018）が実践研究を行っている。永冨は、実践報告の中で、毎時間、学習内容を振り返ることによって、基礎的な知識理解及び技能の向上が期待できることを示唆している。また一方で、振り返りの活用や時間の確保については課題があるとも述べている。

大学院で行った学校教育実践実習でも、振り返りの活動を観察することができた。特に、学校教育実践実習 3 以降で配属された学校では、児童が毎時間の終末に振り返りシートを書いて学びを振り返る様子を観察することができた。自らの学びを振り返って言葉にすることは、学習内容の定着につながるだけでなく、分かる内容と分からない内容を自分で整理し、情意的な表現によって学びの記録を鮮明に残すというよさがあると考えた。そして、「次は分かるようになりたい」と

いった意欲的な表現や、「次は～の方法を使ってみよう」といった見通しをもった表現など、次の時間につなげるような振り返りを自分自身の言葉で書くことができるようになれば、自ら学びに向かい、自ら学びを調整していくことのできる児童になるのではないかという可能性を感じた。

しかし、学校教育実践実習 3 で実践した第 5 学年学級の授業における児童の振り返りの記述を読むと、予想以上に記述量が少なかった。また、振り返りの視点①「今日の学習での新しい発見や気づき、できるようになったこと」と視点②「次の学習で、やってみたいことや、もっとがんばってみたいこと」のうち、視点②について記述した児童（39 人中 17 人）が視点①について記述した児童（39 人全員）に比べて非常に少ないように感じた。

学校教育実践実習 4･5 における配属学級の児童も同様の実態であり、児童によって記述内容に大きく差があった。

そこで、本実践研究では、学習の過程に自ら関与し調整していく自己調整学習の理論を参考とし、児童が自分自身で学びを振り返り、次の学びにつなげていくことができるようになるための教師の手立てについて検討することを目的とした。

2. 授業実践の実際

2.1. 実践の概要

本実践研究では、算数科単元「整数」（全 12 時間）の授業実践を行った。授業実践の中で、振り返りシートを使用して、児童の振り返りを行った。また、児童が学びを振り返ったり、振り返りの記述を生かしたりすることができるような指導を授業の中で行った。

概要として単元の流れをまとめたものが表 1 である。

本実践研究で使用した振り返りシート等（表 1 太枠 1）は「ヒントカード」と３種類の振り返りシート（振り返りシート①～③）と「評価問題付き振り返りシート」である。そして、本実践研究において行った振り返りに関する指導（表 1 太枠 2）は、主に「振り返り記入時における声掛け」、「回収・コメント記入・返却」、「振り返り紹介・交流」、「ポイント指導」、「記述内容の指示・価値」の 5 点である。「振り返り記入時における声掛け」と「回収・コメント記入・返却」は、毎時間行った。「ポイント指導」は、ヒントカードを用いて第 1 時にのみ行い、「振り返り紹介・交流」と「記述内容の指示・価値付け」は学習内容や形態に合わせて適宜行った。

表 1　単元の流れと振り返りに関する指導

時間	学習内容	振り返りに関する指導 2				使用した振り返りシート等 1
		振り返り記入時における声掛け	回収・コメント記入・返却	振り返りの紹介・交流	ポイント指導／記述内容の指示・価値付け	
第 1 時	偶数 奇数	個別指導（書けていない児童に対して）	（授業後）回収しコメント記入 ↓ （授業前）児童に返却		ポイント指導	ヒントカード 振り返りシート①
第 2 時	偶数 奇数					振り返りシート②（1 枚目）
第 3 時	倍数					
第 4 時	公倍数					
第 5 時	公倍数			振り返り紹介	自分の考え・方法	振り返りシート②（2 枚目）
第 6 時	公倍数				身近な事象との接続	
第 7 時	約数					
第 8 時	公約数	個別指導（中心児を決めて）				振り返りシート②（3 枚目）
第 9 時	公約数			振り返り交流	自分の考え 友達の考え	
第 10 時	公約数			振り返り紹介		
第 11 時	練習問題			振り返り紹介		評価問題付き振り返りシート
第 12 時	振り返りまとめ				振り返りのよさ	振り返りシート③

2.2. 実践で使用した振り返りシート等と振り返りに関する指導

ここでは、実践で使用した振り返りシート等と振り返りに関する指導について説明する。合計 5 種類のシートを使用したが、特に成果の見られた振り返りシート①、②、③に絞って記述する。振り返りに関する指導は、主に振り返りシート②において指導を行ったため、振り返りシート②の内容と関連させて記すこととする。

振り返りシート①～③は、伊藤（2017）が紹介している 3 種類の振り返りを単元の中に応用し、作成したものである。振り返りシート①は単元を見通した「診断的振り返り」、振り返りシート②は学びの途中段階で行う「形成的振り返り」、振り返りシート③は単元を通した目標の達成を振り返る「総括的振り返り」として使用した。この 3 種類の振り返りは、評価論に基づいている。

単元の第 1 時には、「ヒントカード」と「振り返りシート①」を使用した。

まずは、ヒントカードについて説明する。実際の授業の中では、第 1 時のポイント指導の際に、ヒントカードの中に示した内容を使って振り返りのポイントを指導したが、その後、他の時間には使用を強要せず、必要に応じて使用するように伝えた。その理由は、児童になるべく自分の言葉で振り返りを書くようになっ

てほしいという思いがあったからである。

表面には、「大切なこと」、「やればできる！」の項目と「使えそうな表現」の項目を示し、裏面には「学習のサイクル」についての図を示した。伊藤（2009）の自己調整学習における 3 段階のサイクルの図（図 1）を参考にヒントカード裏面の図（図 2）を作成した。

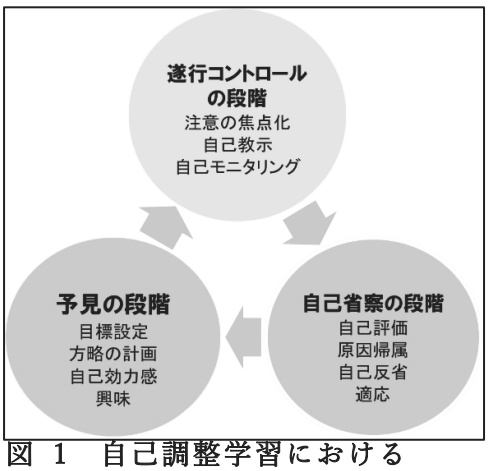

図 1　自己調整学習における
3 段階の過程（伊藤,2009）

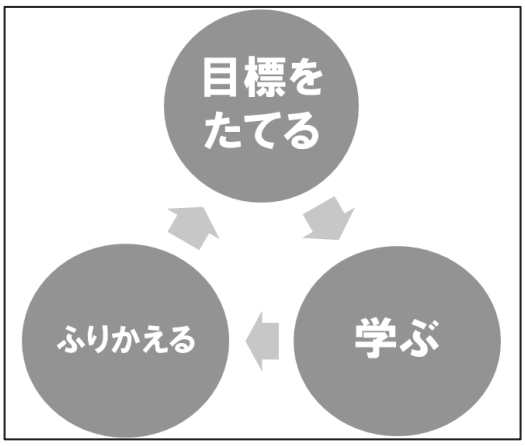

図 2　ヒントカードの裏面に示した図

ただし、関係図の位置は、入れ替えた。順番は同じだが、ヒントカードでは、「ふりかえる」（自己省察の段階）を左下に配置した図になっている。

次に、第 1 時に使用した振り返りシート①と第 12 時に使用した振り返りシート③について説明する。実際に使用した振り返りシート①と振り返りシート③は、図 3 と図 4 である（太枠は第一筆者が追加）。

図 3　振り返りシート①

図 4　振り返りシート③

振り返りシート①は、児童が第1時の中で単元の見通しをもった後に、これからの学びの目標や今の気持ちを書くことができるような形式にした。振り返りシート③については、児童が全12時間の学習を振り返り、学んだことや今後につながる意欲を書くことができるような振り返りシートを作成した。

図3及び図4では、自由記述欄（太枠1）と左下の「今の気持ち」についての問い（太枠2）に対して記述・選択を促した。記述の際に、児童が参考にすることができるように、右下の「学習事項の明示」（太枠3）を行った。

第2時から第10時までは右に示す振り返りシート②（図5）を使用した。（太枠は第一筆者が追加）

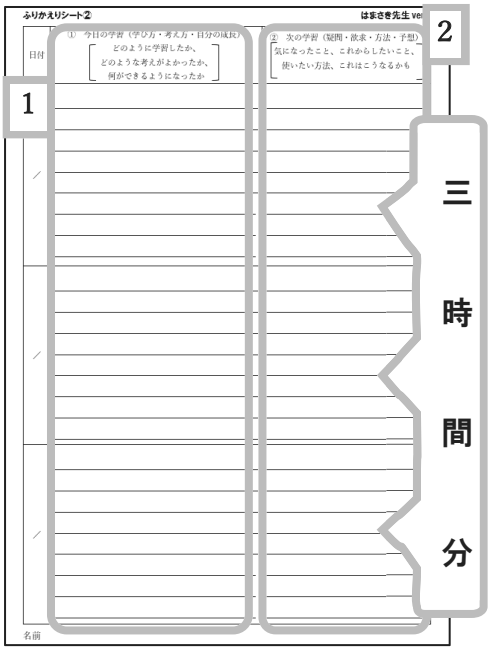

図 5　振り返りシート②

振り返りシート②は、1枚に3時間分の記述欄を設けた。また、「①　今日の学習（学び方・考え方・自分の成長）」（図5太枠1）と「②　次の学習（疑問・欲求・方法・予想）」（図5太枠2）の2つの視点での記述を促した。

「①　今日の学習（学び方・考え方・自分の成長）」の項目（図5太枠1）には、具体的な視点として、「どのように学習したか、どのような考えがよかったか、何ができるようになったか」を示した。この意図としては、その時間の学習について学習内容や学習の方法（学習方略）を中心に振り返ることによって、児童自ら学習をメタ的に認知することができるようになることを目指した。「②　次の学習（疑問・欲求・方法・予想）」の項目（図5太枠2）には、具体的な視点として、「気になったこと、これからしたいこと、使いたい方法、これはこうなるかも」を示した。この意図として、次の学習に対する動機づけや意欲を高めることと、学習を自身で調整していくことを目指した。

上記の振り返りシート②を使って行った指導をまとめたものが表2である。

振り返りシート②では、大きく4点の指導を行った。

①の「振り返り記入時における声掛け」とは、児童が授業内で振り返り記入時に、教師が視点を与えるような声掛けを行ったことである。第8時以降では、気になる児童を中心に声掛けを行った。②の「コメント記入・返却」は、児童が授業中に記入した振り返りを授業後に回収し、その振り返りに対して赤字でコメントを書き、次の時間の最初に児童に返却したことである。③の「振り返りの紹介・交流」は、児童の振り返りの記述を教師が全体に紹介することと児童同士で振り返りの記述を読み合って交流する活動のことである。④の「記述内容の指示・価値付け」では、その授業の学習内容や議論した内容に対する自分の考えや友達の

考えの良い点についての記述に対する価値付けを行った。また、学習事項がどのような場で活用されているか、どのような場で活用できそうかについて考えさせ、記述を促すような指示を行った。

表 2　振り返りに関する指導

指導	時間	指導の内容
①振り返り記入時における声掛け	第 1 時～第 7 時	その時間に書けていない児童に対して視点を与えるような声掛けによる個別指導を行った。
	第 8 時～第 12 時	第 7 時までの観察で気になった児童を中心に視点を与えるような声掛けを行った。
②コメント記入・返却	毎時間	児童の振り返りに対して、共感的な表現と視点を与えるような助言でコメントを行い、返却した。
③振り返り紹介・交流	第 5 時	児童の振り返りを教師が学級全体に紹介した。
	第 9 時	児童同士で振り返りを読み合って交流する時間を設けた。
	第 10 時以降	授業の導入で教師が児童の振り返りを紹介した。
④記述内容の指示・価値付け	第 5 時・第 9 時	自分の考え方や友達の考え方のよさについての児童の記述に対して価値付けを行った。
	第 6 時	身近な場面で学習事項が活用できそうな場面や活用してある場面について記述するよう指示した。
	第 12 時	振り返りのよさについて記述するよう指示した。

3. 実践の成果

本実践研究の成果として、以下の 4 点が挙げられる。

① 学習内容の明示が児童の振り返りの記述を促すことにつながったこと
② 声掛けによる視点の提示、振り返りの指示や価値付け、紹介、児童同士の交流といった手立てを組み合わせることで、振り返りの記述内容の変容につながったこと
③ 振り返りの習慣化によって記述の量が増加したこと
④ 振り返りのフィードバックによって児童が意欲を高めて学習することができたこと

まず、1 つ目は、「学習内容の明示が児童の振り返りの記述を促すことにつながったこと」である。振り返りシート①では、全体的な記述は少なかったが、全員の記述が見られた。この結果は、振り返りシート①に示した「学習内容の明示」によるものではないかと考える。それ以前の児童の記述と比較できていないため、記述量の増加とまでは言えないが、全員の児童が 1 時間の学習に対して視点をもって振り返ることができたのではないかと考える。また、視点をもって学びを振り返ることは、自己調整学習のサイクルのうち、「自己省察」の過程を充実させることにつながる可能性も示唆された。

2 つ目は、「声掛けによる視点の提示、振り返りの指示や価値付け、紹介、児童

同士の交流といった手立てを組み合わせることで、振り返りの記述内容の変容につながったこと」である。振り返りシート②においては、授業中の教師の手立てによって児童の記述内容が変化していることが分かった。特に、「振り返り記入時における声掛け」(視点の提示)、「振り返り紹介・交流」、「記述内容の指示・価値付け」の手立てを組み合わせて行うことには、視点をもった記述や指示や価値付けした内容の記述を増やしたりするという効果があるのではないかと考えた。特に記述内容の変容が見られた第 4 時－第 5 時の記述内容の内訳の変化（表 3）と第 8 時－第 9 時の記述内容の内訳の変化（表 4）を以下に示す。

表 3　第 4 時と第 5 時の児童の記述内容の変化

自分の考えの記述	第 4 時	第 5 時
新しい考え	2 ／37	4 ／37
支持した考え＋理由	2 ／37	11／37
支持した考えのみ	23／37	13／37
考えなし	10／37	9 ／37

表 4　第 8 時と第 9 時の児童の記述内容の変化

考えの記述	第 8 時	第 9 時
自分の考え＋友達の考え	2 ／37	16／37
自分の考え or 友達の考え	9 ／37	19／37
考えの記述なし	26／37	2 ／37

第 5 時には、教師による振り返りの「紹介」と「記述内容の価値付け」の手立てを組み合わせて行い、第 9 時には、児童同士の振り返りの「交流」と「記述内容の価値付け」の手立てを組み合わせて行った。その結果、価値付けした点についての記述が増加した。また、こうした手立てによって、児童が学習方略について振り返るようになることで、学び方を見つめ直し、調整しながら学習していくことにつながるよさもあると考える。

3 つ目は、「振り返りの習慣化によって記述の量が増加したこと」である。振り返りシート①の自由記述の中で、記述欄の半分以上記述している児童は、提出者 37 人中 3 人であった。振り返りシート③では、提出者 35 人中 29 人が記述欄の半分以上記述していた。12 時間の単元の振り返りであるため、振り返りシート①の記述量と比べて記述できる内容は大幅に増えることが考えられるが、児童がこれまで振り返りを長い期間毎日実施することの効果として、児童の記述量が増えたのではないかと考えた。振り返りの習慣化によって、自己調整学習のサイクルも習慣化され、振り返りもよりメタ的に行われるということが考えられる。

4 つ目は、「振り返りのフィードバックによって児童が意欲を高めて学習することができたこと」である。この成果に関しては、児童の振り返りの記述からではなく、児童の見取りによる考察から得たものである。児童の振り返りに対し、教師が「回収・コメント記入・返却」というフィードバックを行うことによって、児童の表情が明るくなったり、自信をもって発表したりする様子が見られた。この姿から、振り返りのフィードバックにより、児童が意欲的に授業に臨むことができたのではないかと考える。また、意欲的に学習に向かうようになった結果として、単元後半の振り返りシートの記述量も増加したことも考えられる。

以上 4 つの成果から、児童が「自分自身で学びを振り返り、次の学びにつなげ

ていく」ことができるようになってきていると考える。その根拠として、振り返りシート③における「振り返りのよさ」に関する児童の記述からもうかがえる。「振り返りのよさ」に関する児童の記述を類別してまとめ、そのうち、次の自身の学びの中で生かしていくことができるという振り返りのよさが記されていると思われるものを以下に示す（表 5)。

表 5　振り返りシート③における振り返りのよさに関する児童の記述の一部

よさ	実際の記述（原文そのまま）
自分の成長や課題（得意と苦手）が分かる	「自分がわからない所とかを記録すれば、そこをもっとがんばる所などが分かるからいいと思う。」 「授業をしたことを思い出して、自分は、どのような所がダメだったか、よかったか、改めて思うよさがあると思います。」
励まされる	「この単元で、楽しかったことや、ぎもん、がんばらないとというのを、思い出させてくれる人」
方法の使用	「このことをもとに、次の学習や、似ている学習があったら、分かった方法でやっていくよさがあると思います。」
やりやすい	「ふり返りをかいたのをみると前にやってべんきょうがおもいだせてやりやすくなると思います。」

児童による「振り返りのよさ」の記述から、児童が振り返りを次の学習につなげる意識をもって実践を行っていたと考えることができる。実践前の記述との比較ができないため、児童のふり返りに対する意識が高まったと言い切ることはできない。しかし、現状として、単元を通した振り返りの実践後の児童が自分の言葉で振り返りのよさについて記述することができていることは、児童の振り返りに対する意識が高まった可能性が示唆される。

4．おわりに

振り返りの実践の最後に、児童が振り返りのよさについて述べていることは、大きな成果であった。自己調整学習のサイクルのように、児童が自身の学びを振り返り、次の学びへとつなげていくためには、まず、児童自身がそのサイクル及び振り返りの意義を実感することが必要であると考える。本実践研究では、最終的にほとんどの児童が振り返りのよさに関して記述することができていた。

一方で、課題として「振り返りを行う時間の確保が必要であること」と「実態に合わせた支援が必要であること」の 2 点が挙げられる。

「振り返りを行う時間の確保が必要であること」については、永冨の実践報告でも指摘されていたことだが、実践を行う中で改めて難しいことであると実感した。振り返りを毎時間行うために、教師による説明の時間をもっと少なくし、板書を減らすための教材の活用、綿密な時間設定を行うようにしたいと考える。「実態に合わせた支援が必要であること」は、今回、振り返りの記述の際に、声掛けを躊躇してしまったという反省から、得られた課題である。自分の学びを振り返って言語化することが苦手な児童に対しては、自由な記述を促すのでなく、振り返るための視点を与えたり、学習内容を一緒に振り返ったりするなどの支援から

行うべきであると考える。

また、今後の展望としては、「様々な手法に挑戦していくこと」と「振り返りを活用していくこと」の２点が挙げられる。振り返りの方法に関しては、振り返りシートへの記述だけでなく、口頭での発表や意見交換などを組み合わせて実践することも効果的であると考える。そして、児童の振り返りの記述を授業の導入に生かしたり、振り返りの記述から児童の態度の評価などを行ったりするなど、振り返りを様々な場で活用することにも挑戦したいと考える。

今後も学校現場において、引き続き振り返りを取り入れた授業実践を行っていく。その中で、今回の実践で明らかになった課題も踏まえつつ、児童に合わせた振り返りの実践を行うことで、自ら学びに向かい、学びを次につなげていくことができるような児童の姿を実現していきたい。

参考文献

・藤井千春『アクティブ・ラーニング授業実践の原理』，明治図書出版，2016.
・伊藤崇達『自己調整学習の成立過程』，北大路書房，2009.
・伊藤崇達『生徒の振り返りと自己調整学習について』，北海道教育員会遠隔授業研究開発推進委員会，講演会資料，2017 年 6 月 9 日.
http://www.kyousei2.hokkaido-c.ed.jp/?action=cabinet_action_main_download&block_id=31&room_id=29&cabinet_id=5&file_id=93&upload_id=144
（2018 年 4 月 27 日閲覧）
・文部科学省『小学校学習指導要領解説　総則編』，2017.
・永冨英臣『振り返りで学力を向上させる授業実践』，長崎大学大学院実践研究報告書，2018.
・Schunk, D. H., & Zimmerman, B. J. (Eds.) *Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice.* New York: The Guilford Press. 1998（塚野州一（編訳）『自己調整学習の実践』，北大路書房，2007.）
・嶋野道弘『学びの哲学』，東洋館出版，2018.